

幕末明治の写真師列伝 第八十三回 宮下欽 その五

慶応4年4月21日(1868年5月13日)、衝鋒隊の古屋作久左衛門などは富倉峠を超えてすでに飯山城下へ入り、天領の代官所がある中野陣屋を襲う様子であった。松代藩の北征軍本隊は小布施に進んで、翌22日には中野に達した。ここで北征軍総括隊長、河原左京は参謀、軍監たちと協議の上、飯山藩を救うため右翼軍に一番、二番小隊を当て、軍監・樋口弥治郎、上原徳之助らを浅野の渡しから千曲川を超えさせて、小布施駅に向かわせ、そこに司令所を設けるように命じた。北征軍本隊である中軍は、布野(長沼)の渡しより千曲川を超え、福島駅の陣を敷き、ここで進軍の準備と今後の作戦を協議した。

一方、総括副隊長・小幡内膳率いる殿軍は、本隊との連絡後、右翼軍と合流し、同年4月22日(1868年5月14日)夜に小布施駅に到着した。この時、本隊のいる陣に飯山藩の使者・弓削一学が来て、「当藩より依頼した援兵の議は、遠慮したい」と言ってきた。この使者の口上は、幕府兵などに脅されて、飯山藩がやむなく送ってきた使者と思われたが、すぐに進撃することは止めにし、飯山方面の状況を偵察することにして、その間に諸藩の援軍の到着を待つこととなった。真田藩以外の信州十藩は総勢1500名の軍勢を派遣するように総督府より命じられていたが、集まりは極めて遅く、当てにできる状況ではなかった。19日に松本を出発したのは松本藩600名だが、23日に中野に到着していた各藩の兵士は以下のとおりであった。上田藩200名、尾州藩300名、諏訪藩200名、岩村田藩60名、田ノ口藩50名、小諸藩80名。このうち、小諸藩の80名は24日に松代(まつだい)を経て帰藩してしまった。

衝鋒隊の古屋など(これ以後、賊軍と書く)は飯山城下の真宗寺を本拠として(飯山城の南にあった寺)、城下の町内の出口を警備し、千曲川岸の渡河阻止のために部隊を集結させようとしていた。そのためこの大部分の部隊が安田村前面と綱切りの渡し付近に布陣していることが、偵察隊により判った。また渡河のための舟もほとんどが賊軍に奪われており、蓮村(はちすむら)、静間村、替佐(かえさ)、神代などの要地には大砲陣地を築いていることも判った。そして已むを得ない事とはいえ、松代藩に救援を要請してきた飯山藩も敵に兵糧を与え、衝鋒隊の古屋などを支援していたのであった。このような状況から、信州各藩の到着を待たずに直ちに松代藩のみで、先発隊が25日に安田口より攻撃をすることを決めた。この時まで間に合って来援したのは尾州藩の元代官・松本省庵ら士卒15名と岩村田藩の一小隊50名のみであったという。この時の攻撃部隊の部署編成で、宮下欽次郎は飯山城本道攻撃隊の三番大砲司令を命じられる。

俗に飯山戦争は、賊軍が25日(1868年5月17日)午前5時頃、松代藩などがまだ到着していないと判断して、安田口の千曲川を数隻の舟で渡ろうとして始まる。この目的は千曲川を渡って安田口に橋頭堡を設けるためであった。これを松代藩の斥候隊の牧野良平が発見して、賊軍に銃撃を加えたことから交戦は始まった。これに対して賊軍も自軍の舟を助けようと銃撃で反撃し、戦闘は千曲川を挟んで激しく行われる。この賊軍に対して安田口の松代藩兵は少数であったため、松代藩兵は苦戦することになる。これを知った尾州兵や腰巻にいた松代藩兵も応援し、松代藩の大砲もその威力を発揮

し始めたこともあって、ようやく松代藩兵の攻撃は優勢となっていた。

この状況から、同日午前12時頃に突如、飯山城内より交戦中の賊軍に向かって砲撃が開始された。飯山藩がようやく賊軍を裏切って攻撃したのである。この砲撃に狼狽した賊軍は千曲川の渡河を諦め撤退し始める。それを見た軍監・河原理助と二番小隊は千曲川を泳いで渡り、飯山城側(千曲川西側)の舟を数艘回送して、安田口の松代藩兵全員の飯山城側への輸送を行い、飯山城下の上町に上陸した。その後、飯山城に通じる道の両側に分れて、城内に向かう。松代軍の上陸をした賊軍は、周章狼狽して、城下の本町、仲町、新町、寺町の町家を放火して、富倉峠に向かって退却してゆく。飯山藩は開城して松代藩兵、尾州藩兵らを入城させて、すぐに飯山藩の重役より賊軍に協力したことの詫びを入れた。

一方、松代藩本隊の方は、千曲川の立ヶ鼻より渡船して、腰巻口より飯山城攻撃に向かうこととなった。その途中で先発隊の安田口が苦戦中であることを知ると、直ちに賊軍を駆逐しながら、替佐峠より山を下りてきた上原徳之助指揮の今井口攻撃隊の松代軍を応援に向かわせる。そして本隊はそのまま蓮村、静間村間の飯山街道の敵を追撃する形で北上し、新町から飯山城下に進軍させる。(飯山城の南から進軍)賊軍は今井口、腰巻口、安田口より退却し、飯山城下に入り、飯山城に入城しようとしたが、城門は固く閉じられ、城内の飯山藩兵より砲火を受けることとなった。城外の衝鋒隊に編入されていた飯山藩兵はこの状況を見て、全員が飯山城西側方面に逃走する。これを見た衝鋒隊の兵士たちもこれでは勝算なしとして、富倉方面へ逃げ出し、松代藩兵はこの敵を追撃して追うこととなった。

賊軍が敗れた原因の一つには、24日に高田藩の間諜2名が丹波島口を警備していた松代藩兵に捕らえられたことにある。この間諜は真田藩などの官軍の配備の状況を調べて、帰藩しようとしていたところを捕縛されたのだった。この間諜の取り調べにより、高田藩の状況や衝鋒隊の古屋作久左衛門の行動が知れた。古屋は高田藩よりの援軍がいまだ到着しないことに憤慨して、一部の兵を率いて抗議のため高田藩へ行っていて、飯山を留守にしていたのである。古屋のいない衝鋒隊は、一旦混乱すれば収拾がつかない部隊と思われた。また衝鋒隊の部隊数も500人くらいであることも判った。古屋のいない賊軍を総攻撃するのは絶好の機会であったのだ。これにより25日の総攻撃が決定された。

富倉方面へ敗走した賊軍は、途中で高田より大急ぎで引き返してきた古屋と出会う。古屋は「直ちに飯山に戻れ」と命じるが、兵たちにはもう戦意はなく、その命を拒んだため、古屋も諦めて衝鋒隊の兵たちと共に、富倉に宿営し、翌26日に新井へ移動した。

新井に着くと、今まで出兵を督促しても出兵しなかった高田藩の藩兵500が新井まで来て、古屋たちを出迎えた。そして高田藩の使者が古屋に「新井の宿営は狭いので、これより広い旧天領の川浦陣屋に宿営されたい」と述べた。これにより古屋たちは新井から26日夜に川浦の陣屋(現在の新潟県上越市三和区番町)へ移動して宿営することとなった。しかしながら、これは高田藩による謀略であった。(森重和雄)